

2023年3月期第2四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2023年3月期第2四半期決算説明資料

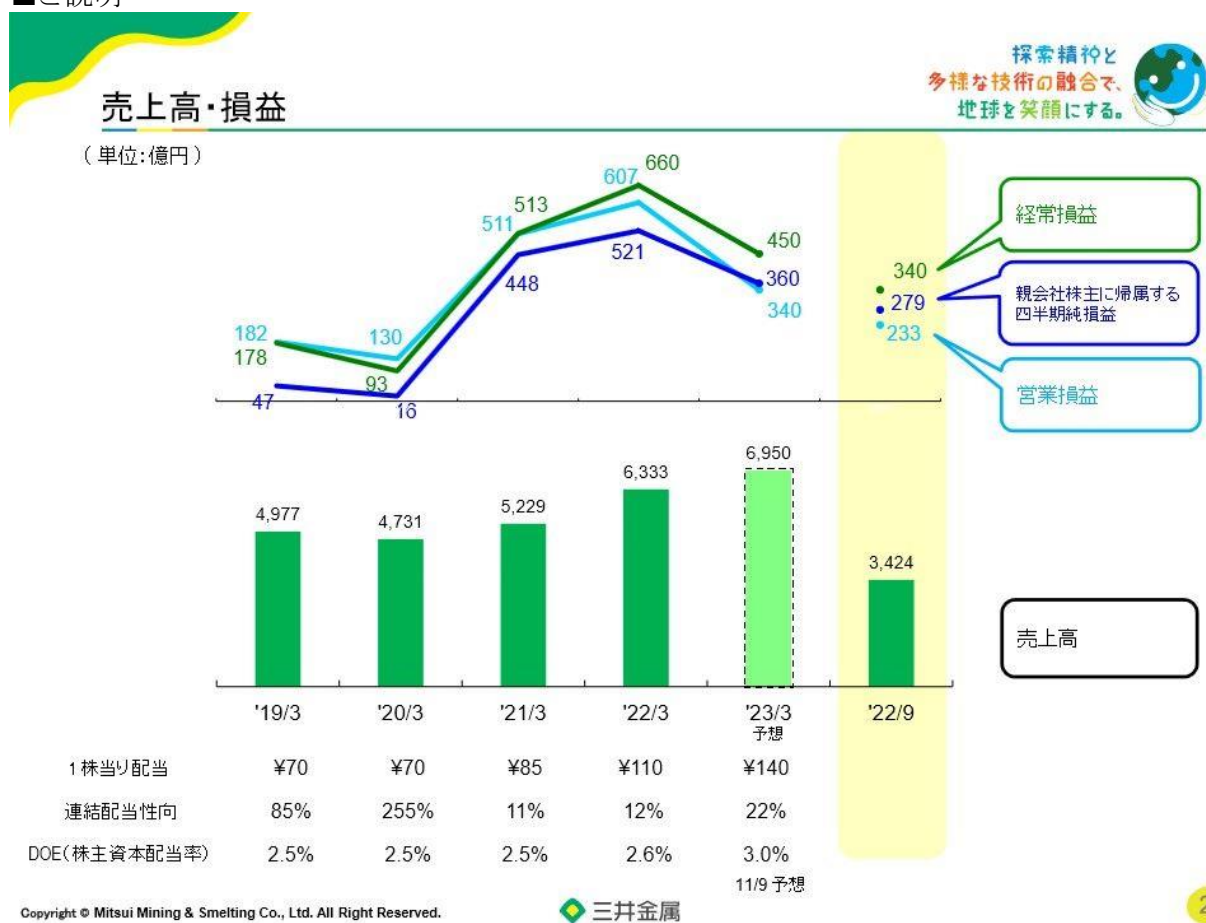
[https://www.mitsui-](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3WJCCmo642s%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0)

[kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3WJCCmo642s%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3WJCCmo642s%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0)

(補足) PKG : パッケージ基板

HDI : マザーボード (High Density Interconnect)

■ご説明



決算説明資料2ページ「売上高・損益」をご覧ください。

・第2四半期累計の売上高は3,424億円、営業利益は233億円、経常利益は340億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は279億円となりました。

・なお、2023年3月期の連結業績予想は、売上高6,950億円、営業利益340億円、経常利益450億円、当期純利益360億円と見込んでいます。

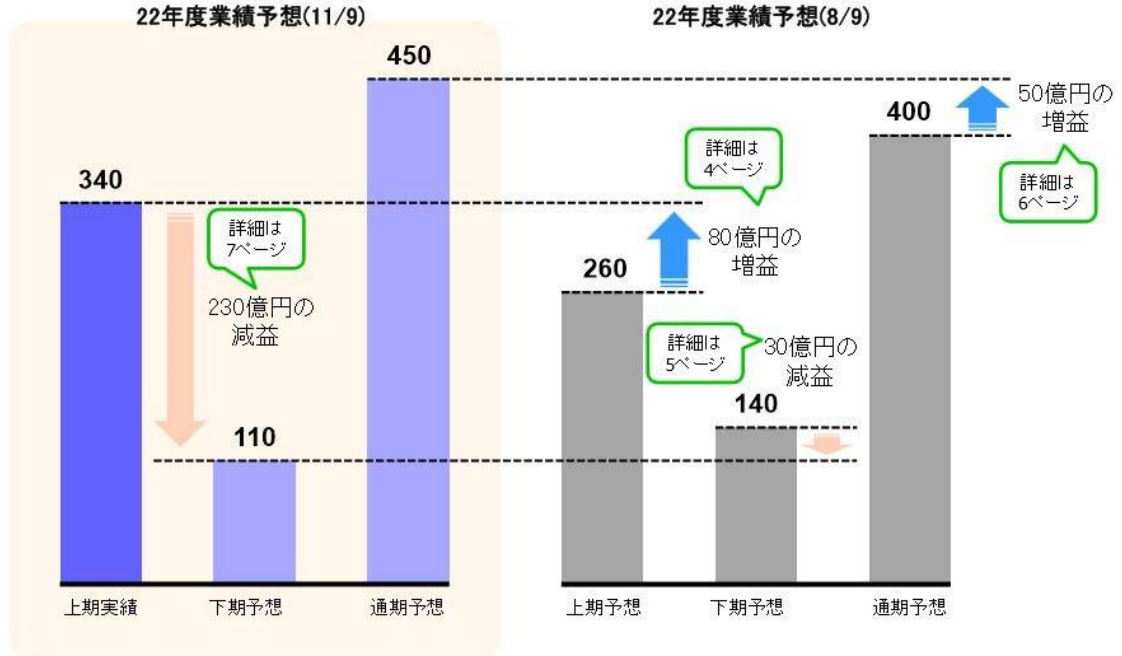
・配当につきましては、従来予想通りの1株当たり140円を見込んでいます。



## 22年度経常利益見込

22年度経常利益は450億円と前回業績予想比で+50億円の増益

(単位:億円)

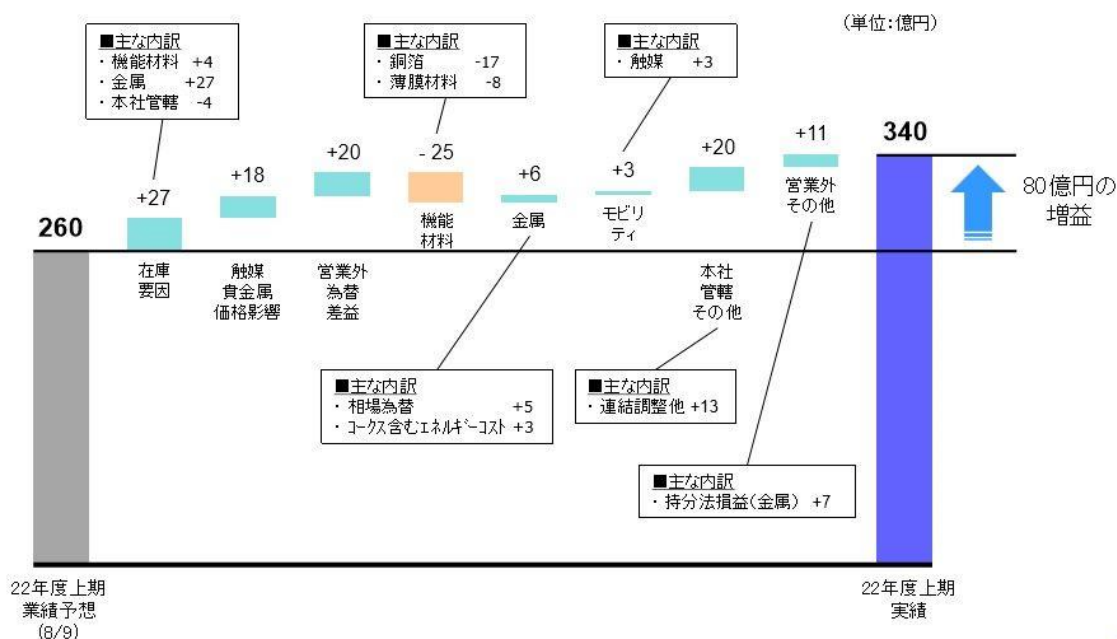


決算説明資料3ページの「22年度経常利益見込」をご覧ください。

- 第2四半期累計期間の経常利益は、8月9日に開示した260億円から80億円増益の340億円となりました。一方下期の予想につきましては、上期の実績から230億円減益の110億円を見込んでいます。
- 通期の予想につきましては8月9日に開示した400億円から50億円増益の450億円を見込んでいます。それぞれの要因につきまして次ページ以降でご説明いたします。

## 22年度上期経常利益

22年度上期経常利益は340億円と前回業績予想比で+80億円の増益



まず上期業績の上振れ要因についてご説明いたします。決算説明資料4ページをご覧ください。

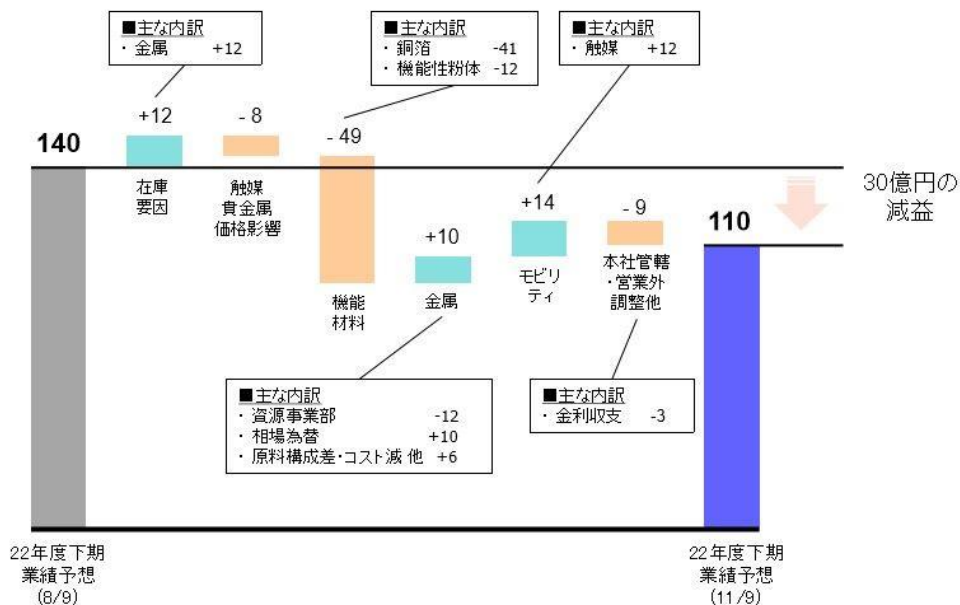
・好転のうち、最も影響の大きかったのが、為替が円安に動いたことによる影響です。棒グラフ一番左の在庫要因や、その二つ右の営業外為替差益、また各事業ラインにおける影響などを合わせると、為替の円安効果であわせて約35億円の好転要因となっています。

・一方で機能材料セグメントにおいては、MicroThin™の販売量が想定より弱かったことやエネルギーコスト上昇の影響等により銅箔事業で17億円の減益となったほか、薄膜材料においても減販の影響が大きくセグメント全体では25億円の減益となったものの、触媒の貴金属価格影響で18億円のプラスとなったことや亜鉛価格も高めに推移した影響などにより、全体で80億円の好転となりました。

## 22年度下期経常利益見込

22年度下期経常利益は110億円と前回業績予想比で30億円の減益

(単位:億円)



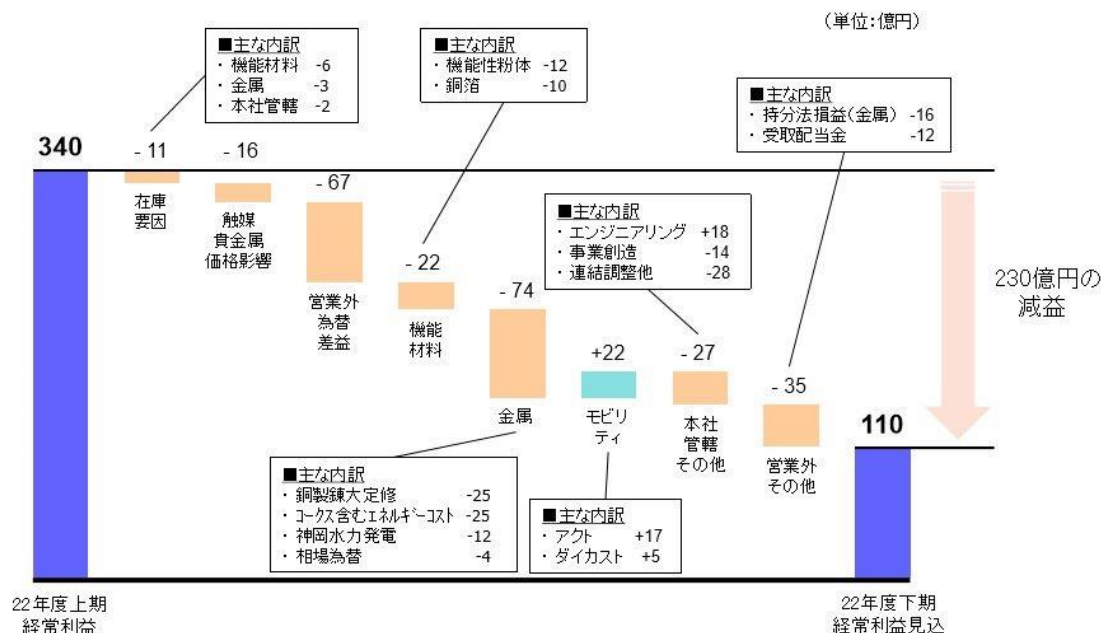
次に下期業績予想の下方修正の要因についてご説明いたします。決算説明資料5ページをご覧ください。

・従来予想より30億円の減益といたしました。為替を135円/\$から145円/\$と見直したことにより、全体で約55億円の好転要因となるものの、機能材料セグメントにおいて、MicroThin™の販売量を従来予想より約30%引き下げた影響や、機能性粉体事業や薄膜材料事業における販売量減少の影響を織り込み、従来予想より大幅に減益となると見込んでいます。

・そのほか金属セグメントにおいてはペルーのワンサラ鉱山の通常操業開始が遅れている影響により資源事業で12億円の減益を見込んでいます。全社では円安による好転を機能材料市況の悪化等が打ち消すかたちとなる見込みです。

## 22年度下期経常利益見込

22年度下期経常利益は対上期比で230億円の減益を見込む



続きまして上期から下期にかけての減益についてご説明いたします。決算説明資料7ページの「22年度下期経常利益見込」をご覧ください。

・上期の経常利益340億円から下期の110億円まで230億円の減益を予想しています。要因として最も大きいのは円安の進行に伴う営業外為替差益の上下差で、67億円の減益要因となっています。

・また金属セグメントにおいては下期に銅製鍊所の大規模定期修繕を予定していることや、エネルギーコストアップの影響が下期により大きく発生すること、季節要因として水力による発電量が下期には減少することなどにより74億円の減益を見込んでいます。

・機能材料セグメントにおいてもMicroThin™の下期の販売量が上期比で約20%減少すると見込んでいること等から、22億円の減益と予想しています。

・そのほか事業創造本部のコストが下期に増加することや、上期に計上した受取配当金が下期には発生しないことなど、これらの要因により上期から下期にかけては大幅な減益となる見込みです。

## 損益計算書

(単位: 億円)

探索精神と  
多様な技術の融合で、  
地球を笑顔にする。

	上期			下期			通期		
	2022 実績	2021 実績	増減 (22-21)	2022 見込	2021 実績	増減 (22-21)	2022 見込	2021 実績	増減 (22-21)
売上高	3,424	3,053	371 12.2%	3,526	3,281	245 7.5%	6,950	6,333	617 9.7%
売上原価	2,865	2,395	470 19.6%	-	-	-	-	-	-
売上総利益	559	657	-98 -15.0%	-	-	-	-	-	-
販売費・管理費	326	300	26 8.6%	-	-	-	-	-	-
営業利益	233	357	-124 -34.8%	107	250	-143 -57.2%	340	607	-267 -44.0%
営業外収支	107	19	89	3	34	-31	110	53	57
経常利益	340	376	-36 -9.5%	110	284	-174 -61.3%	450	660	-210 -31.8%
特別損益	-6	9	-16	-15	-24	9	-21	-15	-7
税引前利益	334	385	-51 -13.3%	95	260	-165 -63.6%	429	645	-217 -33.6%
税金費用・非支配株主帰属損益	55	72	-17	14	53	-39	69	124	-56
親会社株主に帰属する 当期純利益	279	313	-34 -10.9%	81	207	-127 -61.1%	360	521	-161 -30.9%

第2四半期累計期間の実績と通期の見通し等についてご説明いたします。決算説明資料8ページの「損益計算書」をご覧ください。

・第2四半期累計期間は、前年同期に対し、亜鉛価格が上昇したことや円安が進行したこと等により、売上高は371億円(12.2%)増加し3,424億円となりました。一方、機能材料セグメントの販売量減少に加え、エネルギーコスト上昇の影響などから、営業利益は124億円(34.8%)悪化の233億円、経常利益は36億円(9.5%)の悪化で340億円、親会社株主に帰属する純利益は34億円悪化の279億円となりました。

・通期見通しについては、第3四半期以降の相場を亜鉛3,000\$/t、為替相場を145円/\$で見て、経常損益450億円を見込んでいます。



## セグメントの業績(1) 機能材料

(単位: 億円)

	上2022 実績	上2021 実績	増減 (22-21)	下2022 見込	下2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 見込	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	657	692	-35	613	669	-56	1,270	1,361	-91
■営業利益	109	152	-43	81	142	-61	190	294	-104
■経常利益	124	152	-28	76	148	-71	200	300	-100
※実力損益	118	145	-27	76	135	-58	194	280	-86

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

(機能材料製品)	(主な用途)
機能性粉体 (電池材料)	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイブリッド車向けニッケル水素電池</li> <li>・電気自動車向けリチウムイオン電池</li> </ul>
機能性粉体 (機能粉)	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種電子部品</li> <li>・ガラス研磨材</li> </ul>
銅箔	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・高密度半導体パッケージ材料</li> <li>・プリント配線基板</li> </ul>
薄膜材料	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・フラットパネルディスプレイ</li> </ul>

### 経常利益の増減説明

[ '上2021' → '上2022 - 28 ]

銅箔 -23 (電解銅箔・MicroThin™減販他)  
機能粉 -9 (銅粉他減販、原料価格高騰他)  
電池材料 +5 (増販他)

[ 'FY2021' → 'FY2022見込 - 100 ]

銅箔 -62 (電解銅箔・MicroThin™減販他)  
機能粉 -24 (銅粉他減販、原料価格高騰他)  
薄膜材料 -18 (在庫要因他)  
電池材料 +4 (増販他)

続きまして、セグメント毎の状況についてご説明いたします。

まずは機能材料について決算説明資料15ページの「セグメントの業績(1)機能材料」をご覧ください。

・上期の経常利益は前年同期比で28億円減益の124億円となりました。減益要因としましては、銅箔事業において、電解銅箔全体の販売量が約30%減少したことやMicroThin™の販売数量が約6%減少したこと等により23億円の減益となったことが最も大きなものとなっています。

・通期の予想については前年同期比で100億円マイナスの200億円と見込んでいます。マイナスで一番大きいのは銅箔事業で、62億円の減益と見ております。上期同様、電解銅箔全体の販売量が約27%減少するとみていることや、MicroThin™の販売数量が約12%減少するとみていること等が大きな減益要因となっています。また、機能粉事業における減販等の影響による24億円の減益や、薄膜材料事業における在庫要因による減益14億円を含む18億円の減益等の影響により100億円という大きな減益予想となっています。

## セグメントの業績(2) 金属

(単位: 億円)

	上2022 実績	上2021 実績	増減 (22-21)	下2022 見込	下2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 見込	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	1,348	1,135	214	1,332	1,275	57	2,680	2,409	271
■営業利益	93	170	-76	17	172	-156	110	342	-232
■経常利益	133	179	-46	27	184	-157	160	363	-203
※実力損益	123	132	-9	20	121	-101	143	253	-110

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

### 経常利益増減分析

	上2021→ 上2022	FY2021→ FY2022見込
相場・為替	56	81
T/C条件(亜鉛)	7	15
たな卸資産在庫要因	-37	-93
持分法損益	22	18
コークス	-29	-36
受取配当金	1	1
その他※	-66	-189
合計	-46	-203

### 2022年度年間損益感応度(経常損益)

(単位: 億円)  
フォローアップ 予約含む

	±100\$/t	13.4	8.6
亜鉛(LME)	±100\$/t	4.0	4.0
鉛(LME)	±100\$/t	5.5	4.2
為替	±1yen/\$		

### 亜鉛TC条件

	FY2020	FY2021	FY2022
	299.75 \$/t	159 \$/t	230 \$/t

### ※その他の主な内訳

上2021→ 上2022	エネルギーコスト-37、亜鉛・鉛コスト増-13、銅製錬-6、 資源事業部-6、
FY2021→ FY2022見込	エネルギーコスト-93、日比製錬大定修-25、資源事業部-23、 亜鉛・鉛コスト増-24、PGMリサイクル-7

続きまして金属事業セグメントです。決算説明資料16ページの「セグメントの業績(2) 金属」をご覧ください。

・上期の経常利益は前年同期比で46億円減益の133億円となりました。亜鉛相場上昇や為替円安の影響で56億円のプラス要因となったものの、コークスを含むエネルギーコストの悪化で66億円のマイナスとなったことや、在庫要因による影響が37億円減少したことなどの影響が大きく、減益となりました。

・通期の予想に関しては、前年同期比で203億円の減益を見込んでおります。こちらも特に為替の円安による影響が大きく、相場・為替で81億円の増益要因となるものの、コークスを含むエネルギーコストの上昇により129億円と大きな減益要因となっていること、また前年度110億円と大きくプラスサイドだった棚卸資産の在庫要因による影響が今年度は17億円と93億円の減益要因となる見込みであること、さらに今年度は銅製錬所の大規模定期修繕を計画していることなどから、大幅な減益を見込んでいます。





## セグメントの業績(3) モビリティ

(単位: 億円)

	上2022 実績	上2021 実績	増減 (22-21)	下2022 見込	下2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 見込	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	1,092	1,047	44	1,218	1,024	195	2,310	2,071	239
(内、三井金属アクト)	(418)	(378)	(40)	(472)	(410)	(62)	(890)	(788)	(101)
■営業利益	38	68	-30	44	-53	97	82	15	67
(内、三井金属アクト)	(-11)	(0)	(-12)	(6)	(-3)	(9)	(-6)	(-3)	(-3)
■経常利益	75	68	7	40	-44	83	115	24	91
(内、三井金属アクト)	(-4)	(6)	(-10)	(4)	(-1)	(5)	(0)	(5)	(-5)
※実力損益	67	28	39	48	56	-9	115	84	31

※実力損益：経常利益から触媒貴金属価格影響を除いたもの

### 経常利益の増減説明

(モビリティ事業本部)	(主な製品)
触媒	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・二輪車・四輪車</li> <li>・排ガス浄化用触媒</li> </ul>
三井金属アクト	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自動車用ドアロック</li> </ul>
三井金属ダイカスト	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイカスト製品</li> </ul>

['上2021→'上2022 +7]

触媒 +15(増販他)  
アクト -10(鋼材・樹脂価格上昇他)  
ダイカスト +5(歩留改善他)

['FY2021→'FY2022見込 +91]

触媒 +87(増販・貴金属価格影響他)  
アクト -5(鋼材・樹脂価格上昇他)  
ダイカスト +12(歩留改善他)

### アクト増減分析

	上2021→ 上2022	FY2021→ FY2022見込
増減販	-1	6
コスト削減	3	6
その他※	-12	-17
合計	-10	-5

※その他の主な内訳

	上2021→ 上2022	FY2021→ FY2022見込
鋼材・樹脂価格上昇	-10	-14
輸送上昇	-2	0

続きましてモビリティセグメントです。決算説明資料17ページの「セグメントの業績(3)モビリティ」をご覧ください。

・上期は前年比7億円増益の75億円となりました。三井金属アクト社においては鋼材や樹脂価格上昇の影響などにより10億円の減益となったものの、触媒事業において、為替の円安効果と二輪向け・四輪向けともに増販となったこと等により貴金属価格影響による減益をカバーし、15億円の増益となりました。

・通期に関しては前年比91億円増益の115億円を見込んでいます。触媒事業において前年度60億円のマイナスサイドで影響していた貴金属価格影響がなくなったことおよび増販の影響等により87億円の増益となったことがその主な要因です。

## 財政状態

(単位: 億円)



\*Net有利子負債/自己資本

Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Right Reserved.

財政状態についてご説明いたします。決算説明資料の19ページをご覧ください。

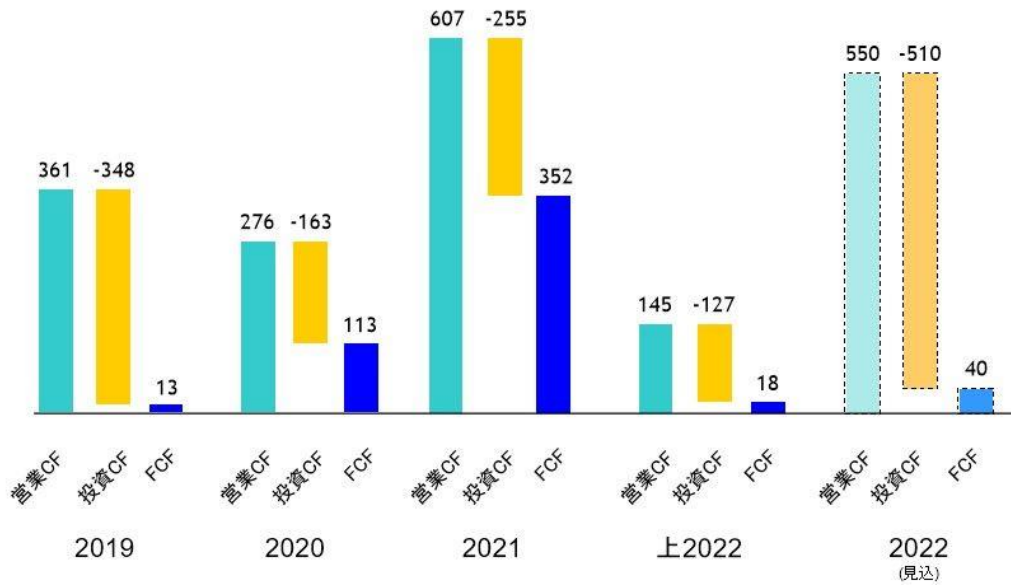
・下期の予想を織り込んだ年度末の連結自己資本比率は41.5%、ネットD/Eレシオは0.71となる見込みであり、当初の計画通り推移しています。



# キャッシュフロー



(単位: 億円)



Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Right Reserved.



20

キャッシュフローについては、決算説明資料20ページをご覧ください。

・今年度は、棚卸資産の増加により営業キャッシュフローが当初の計画を下回ると見込んでいますが、実態面では棚卸資産の圧縮等により、できるだけフリーキャッシュフローを好転させるべく取り組んでまいります。

## ■質疑応答

### 【全体】

Q. 銅箔や機能粉など機能材料各製品および自動車向けについて、マーケットの環境に沿って何が起きたのか教えてほしい。

A. 電解銅箔はQ2で1,250t/月と8月時点の想定からも大きく減販した。電解銅箔のうちフレキ向けと通信インフラ向けについてご説明する。フレキ向けは、メイン顧客である中華系、韓国系のスマホが低迷したことが大きな要因。通信インフラ向けは上期中に在庫調整が終わり下期から回復を見込んでいたが、ローエンド、ミドルのサーバー用途でQ2に入り在庫調整が拡大したため、当社の電解銅箔がQ2で急激に在庫調整局面に入った。

MicroThin™について、HDI向けは通常Q2でピークを迎えるが、Q1は半導体の不足感がまだ強く、お客様が前倒して材料を手配されたと考えており、Q2ではなくQ1にピークを迎えた。ただ、上期に立ち上がりのピークを迎える動向に大きな変わりはない。PKG向けについて、スマホ向けは低迷が深刻度を増したため、こちらも8月時点の想定を下回っている。サーバーのメモリ用途を中心とした非スマホ向けについては、8月時点では一部のお客様を除いて受注が比較的堅調だったが、こちらも在庫調整局面に入り、Q1からQ2にかけて大きなマイナスとなった。

機能粉のうち銅粉については、中華系スマホの低迷およびMLCCのお客様の操業度低下によりQ1からQ2にかけて受注が減った。

自動車関連の部材は、Q1からQ2にかけて半導体不足の影響緩和に加えて、当社のドアロック

では中国のロックダウンの影響が大きかったQ1に比べると、Q2はその影響も少なくなるなど、Q1からQ2にかけて販売量が増加した。

- Q. 来期に向けて機能材料は在庫調整がいつ終わるかがポイントだと思われるが、金属やモビリティを含め、来期を見る上でのヒントや気を付けるべき点について教えてほしい。
- A. 機能材料は仰るとおり、いつマーケットが回復してくるかであり、来年度に向けて回復を期待している。金属は今年度下期に銅製錬で約25億円の大規模定修があり、来年度は亜鉛製錬で約10～15億円の大規模定修が行われるため、定修関係で今年度から約10億円は改善見込。触媒や自動車部品のモビリティは、半導体不足の影響緩和がさらに進み、来年度は自動車市況の本格的な回復を想定し、今年度より改善すると見ている。

#### 【機能材料セグメント】

- Q. 下期の電解銅箔がQ2の1,250t/月に対して、1,530t/月と回復する想定だが、その背景を教えてください。
- A. フレキ向けと通信インフラ向けとも下期はQ2より回復を想定している。ただし、フレキ向けは、中華系スマホの低迷長期化により下振れリスクも考えられる。通信インフラ向けも、お客様から注文をいただくなど明確な兆候がなく、こちらも状況次第では下振れリスクがある。
- Q. スマホ1台あたりのMicroThin™搭載量について、今年のモデルの状況を教えてください。
- A. HDI向けは、昨年比で基板層数の増加あるいは基板面積拡大の話は聞いていない。実際にはスマホを開いてみないと分からないため、現時点では詳細を把握していない。
- Q. PKG向けについて、新モデルのMicroThin™搭載量の増減について何か把握されていないのか。
- A. 詳細はスマホを開けてみないと分からない。ただ傾向として、カメラ性能が上がるなどの高機能化により、当社のMicroThin™が採用されて1台あたり使用量の増加が見られた。今年の北米系スマホメーカーの上位モデルもカメラ性能が向上しているとの話をきいており、1台あたり使用量が増える可能性はある。
- Q. 機能材料について、在庫要因を除いた経常利益が、Q1の87億円に対してQ2が30億円まで減少している。数量効果が大きいと考えるが、コスト等他の要因も含めて解説いただきたい。
- A. 減益の内、銅箔事業が多くを占めており、MicroThin™や電解銅箔の販売減が大きなウェイトを占めている。残りは主に薄膜材料や機能粉、中でも銅粉の販売減であり、コスト関係ではない。
- Q. PKG向けMicroThin™の数量が前期比で1割強減る計画となっており、スマホ需要の減少と同じか若干厳しい印象がある。使用原単位の上昇やスマホ以外のアプリケーション拡大などあると思うが、今年度のMicroThin™の前期比での減少をどのように整理すればよいか教えてください。
- A. PKG向けの成長について、スマホの使用原単位等はおそらく増える方向と考えている。ただ、中華系スマホが深刻な状況にあり、その影響を加味している。非スマホ向けもサーバー用途を中心に減少傾向であり、アプリケーションの拡大は把握しているが、どう拡大するのか現状予測できておらず、アプリケーションの拡大は織り込めていない。COVID-19以降、MicroThin™は受注が強い状況が続いてきたこともあり、昨年や今年Q1には実需以上の受注が結果的には含まれていたと考えている。そのため、好景気が長かった分、低迷時の反動が大きくなっているのが現在の状況と理解している。
- Q. HDI向けは中華系スマホ2社に採用されているが、ハイエンドがメインのため、販売量の規模は大きくないということか。
- A. そのとおり。まだハイエンドの一部機種に採用が留まっており、数量的なインパクトはほとんどない。また、お客様の広がりについて新しい話は聞いていない。

Q. MicroThin™の在庫調整の終わりをどのように考えられているのか、PKG向けとHDI向けについて教えてください。

A. PKG向けは下期の回復の兆しは見ておらず、Q2の低迷が下期も続くとしている。HDI向けは、お客様が北米系スマホメーカーメインであり、北米系スマホメーカーの作り込みが終わる下期は従来通り上期から減少すると見ている。また、数量も北米系スマホメーカーの販売によるところが大きい。

#### 【金属セグメント】

Q. 金属市況が乱高下しているが、ヘッジ状況に大きな変化はあるのか。

A. 予約状況は変化がない。22年度は亜鉛が約2,980\$/tで約35%の予約率。為替は110円/\$で25%弱予約。23年度は、亜鉛が2,900\$/tで約7%の予約率。為替は約110.5円/\$で約15%予約。24年度は、亜鉛が2,800\$/tで約7%、為替は110円/\$で約5%予約。

#### 【モビリティセグメント】

Q. モビリティについて、下期の営業利益、経常利益ともに上方修正されている。P13主要製品の動向のサイドアラッチでは下期販売量は前回予想から下方修正されているが、下期利益の上方修正について解説してほしい。

A. 基本的な動向として、上期から下期にかけて半導体不足の影響が緩和される見方は、前回予想から変わっていない。それに伴い自動車市場も回復を見込むが、その回復を前回より緩やかに見ているため販売量を下方修正した。モビリティの下期利益の上方修正は二輪向け触媒の販売増が要因。

Q. アクトが上期から下期にかけて増益で想定されている。コストアップの価格転嫁が進むことによるのか、それとも原材料価格などが落ち着いてきたことによるのか、今後のマージンの水準についてどのように見なければよいか解説してほしい。

A. 上期から下期への増益は、自動車市況の回復による増収が最も大きな理由。現在、鋼材価格は落ち着いてきたが、樹脂価格やその他関連部材の価格などはまだ厳しい状況。お客様に価格転嫁をお願いしているが、反映に時間がかかっており、マージンの改善は織り込んでいない

以 上